

《研究ノート》

銅直勇教授の社会学 (3)

——「社会」概念の考察を中心に (前)——

高 島 秀 樹

目 次

はじめに

1. 銅直勇教授の経歴と業績

- (1) 銅直勇教授の経歴
- (2) 銅直勇教授の業績

2. 銅直勇教授の社会学

- (1) 社会学の概念
- (2) 社会現象とは何か
- (3) 社会学の方法
 - 一般的とはどのようなことか——

(4) 社会学の構造

(5) 純正社会学の諸問題

(6) 銅直勇教授の社会学の位置づけ

——米田博士の社会学との関係を中心に—— [以上前々稿]

3. 高田保馬博士との社会・社会現象の本質に関する論争

- (1) 論争の経過
- (2) 高田保馬博士の社会・社会現象の本質に関する学説
 - 『社会学原理』から——
- (3) 銅直勇教授の問題提起
 - 「新著紹介 社会学原理 高田保馬著」から——
- (4) 高田保馬博士の再説
 - 『社会学関係の研究』から——
 - 1) 『社会学関係の研究』第2章の構成と基本的視点
 - 2) 社会の本質としての「望まれたる共同生存」
 - 3) 銅直勇教授の問題提起に対する自説の提示
- (5) 銅直勇教授の社会・社会現象の本質に関する学説
 - 1) 「社会学の概念」論文における社会・社会現象の概念
 - 2) 『純正社会学概論』における社会・社会現象の概念
 - 3) 銅直勇教授の社会と社会の本質に関する学説 [以上前稿]

4. 「社会」概念の考察 [以下本稿]

(1) 銅直勇教授における「社会」概念の考察

1) 本論考の研究目的

2) 銅直勇教授における「社会」概念の考察の目的と方法

(2) 「中国に於ける『社会』の意義」論文における考察

1) 中国古典に見る「社会」の用例

2) 「社」の意義

3) 「会」と「社会」の意義

(3) 『社会』続考」論文における考察

1) 「社」の原義とその意味の転化

2) 「社会」の原義とその意味の転化

3) 中間的存在としての「義倉社会」

4) society の訳語としての「社会」の妥当性

(4) 「社会」概念についての検討

(5) societas、universitas の概念と近世「社会」概念 [以下次稿＝詳細項目略]

おわりに

4. 「社会」概念の考察

(1) 銅直勇教授における「社会」概念の考察

1) 本論考の研究目的

銅直勇教授は広島高等師範学校国語漢文部で学び、旧制中学校の教諭も務めた経歴からも理解されるように国語・漢文、中国古典に関する深い造詣を持っていた。その後、京都帝国大学文科大学哲学科（社会学専攻）・大学院に学んだが、学部在学中は米田庄太郎教授に社会学を学ぶとともに、歴史学・社会史研究者である内田銀蔵教授にも学び、『座』の意義及びその発生」という卒業論文を完成させたこと、また、後に社会経済史学会の創立発起人となったことなどの研究歴からも理解されるように社会学のみならず歴史・歴史学についても深い学殖を持っていた。こうした学問的蓄積を持つ銅直教授ならではの研究領域として「社会」という用語・概念の歴史的考察をあげることができる。

今日の標準的な理解を代表するものとして1993年に刊行された森岡清美・塩原勉・中間康平編『新社会学辞典』を見ると、塩原勉が「社会」の項目の中で、「社会」という用語・概念の原義、明治初期に society の訳語として「社会」という用語があてられた経緯に関して、次のように説明している。

蔵内数太の考証によれば、社会という言葉の古い用例は中国宋代の『近思録』巻九に引かれている「明道先生行状記」の「郷民、社会ヲ為ル、為ニ科条ヲ立ツ」である。社は土地の神を意味し、社会とは土地の神を祭るために一定の地域の人々が社場に会合することであると解せられ、また一定の地域の人々の団結であるとも解せられる。この社会という言葉には人と土地との結合、人と人との結合という二重の意味が含まれている。ドイツ語のゲゼルシャフトの語源である古代高地語の gisellio は一つの場所に共にある仲間を意味するものであったという。フランス語、英語

の社会の源流にあるラテン語 *societas* は仲間、共同、連盟を意味していた。日本では「社会」という言葉が定着しはじめたのは1877（明治10）年頃からといわれる。社会という観念は西洋思想の導入によって日本で自覚されるに至ったものであるが、当初は会社、社中、社交、公会、世態など、どちらかというところ結社型の発想で西欧育ちの市民社会観念を翻訳しようと工夫したようである。1875年に東京日日新聞で福地源一郎が「社会」にソサイチーと仮名をつけて用いた頃から、この言葉が定訳になっていったとみられる。西周もはじめ広義の社会を「社交」とよんでいたが、1877年訳の J.S.ミル『利学』（『功利主義』の訳）では社会の文字を用いるに至った。社会という訳語はやがて中国に逆輸入され、中国でも定着することになった⁽¹⁾。

銅直教授の研究は今日このような考え方が標準的な認識として共通理解を得る過程において大きな意義を持つと考えられるのであって、本稿では銅直教授の研究の概要を明らかにするとともに、それを通して「社会」という用語・概念の原義を考察していくことを目的とする。

2) 銅直勇教授における「社会」概念の考察の 目的と方法

銅直教授の「社会」概念の歴史的考察は二方面に大別される。その1は、明治以降、日本に社会学、社会概念が導入されて以来 *society* の訳語として用いられてきた「社会」という用語の原義を中国の古典に求めて明らかにし、それが訳語とし適切か否かを検討しようとする研究である。その2は、西欧における *society* という用語・概念の原義をローマ時代の *societas*、*universitas* から考察し、その上で近世における「社会」概念の成立とその後の市民社会的系譜を明らかにしようとする研究である。この領

域に関する銅直教授の研究成果としては次の諸論文があり、以下の考察においてもこれら諸論文を主な検討素材とする。

「中国に於ける『社会』の意義」（『社会学論叢』第4号、1956年6月、所収）

「『社会』続考」（『日本大学研究年報』第7号第2分冊、1957年3月、所収）

「社会概念の市民的系譜」（『社会学論叢』創刊号、1953年11月、所収）

「近世社会概念の成立序説—社会概念の原初形態—」（『日本大学創立七十周年記念論文集』1960年11月、所収）

「ローマ時代における社会 *societas* 概念の成立」（『現代社会と社会学（日本大学社会科学創立五十周年記念論文集）』1972年1月、所収）

以下、この二方面の研究について順次取りあげていくが、紙数の制約から本稿では、その前半として「社会」という用語の原義を中国の古典に求めて明らかにし、訳語としての適否を検討しようとする研究についてのみ取りあげることとする。この部分についての主な考察素材は前二論文である。

銅直教授は「中国に於ける『社会』の意義」論文の冒頭において「…（略）…『社会』なる訳語が如何なる程度にまで *society* という語に適當しているか…（略）…社会学の一研究者として日々口にするこの『社会』なる用語の意義を精確に理解したいということは私の年来の宿願であった。」⁽²⁾と記しており、きわめて簡明ながらここに銅直教授の「社会」という用語・概念を明らかにし、訳語としての適否を検討しようとする研究の動機、目的が明示されている。

銅直教授はこの論文が公刊された1956年時点までの先行研究について、次のように把握して示している。

「社」及び「會」の意義、並に近代中国に於けるその組織機構、又成語としての「社会」の出典と用例や、その我国に於ける用字の移入等については今日既に諸家の研究によって相当詳しく明にされている。即ち「社」「會」「社会」なるものについては林恵海教授によって総覽的に諸用例が舉示され、又「社」「書社」等の諸事項については加藤常賢氏の周密精緻な研究がある。尚中国近代の「社」及び「會」については直接中国に於ける現地的実態調査によって根岸侑、仁井田陞、福武直、今堀誠二其他諸家の詳細な研究報告が公にされている。我々はこれ等の研究によって既に多くを教えられているのである。然しながら成語としての「社会」なるものの用例は比較的少く、それが果して如何なる実体を有するものであるかについて今日未だ十分明らかにされていないのである。

思うに「社会」なる用語の出典について我國に於ける最も早い文献は有賀長雄博士の増補社会進化論（明治二十年）であろうと思う。次で遠藤隆吉博士は「社会学原論」（大正十一年）に於いてやや詳しい説明を与えられている。又我国に於いて「社会」なる語の明治以前に於ける使用については蔵内数太博士によって注意されて居り、又明治初年に於いて洋語 society の訳語として使用され始めた前後のことについては下出隼吉氏の研究があり、又蔵内博士の社会学概論の中にもこれについての記述がある⁽³⁾。

このような先行研究についての把握に続けて、銅直教授は「社会」という用語・概念の中国における原義を明らかにするために、次のような基本的な考え方、手順にしたがって研究を進めることを示している。

然し「社会」なる成語の中国に於ける意義は如何なるものであったであろうか。いうま

でもなく「社会」の意義を明にするには先ず「社」なるもの（の一筆者補）意義を明にすることが必要である。我々はこれによって初めてよく中国に於ける「社会」の意義の本質を理解することが出来るであろう。然しながら社会は発達するものであり、従って「社」の意義やその構造機能にも亦時代によって種々なる発展がある。それ故に「社会」の意義を明にするには先ず「社」の起源を明にすると共に、又「社」の発展形態について知ることが必要であり、同時に又「社会」なる用語が如何なるものとして使用されていたかを歴史的事実について明にしなければならない。かくして始めて「社会」なる訳語が如何なる程度にまで society という語に適当しているかを決定することが出来るであろう⁽⁴⁾。

（2）「中国に於ける『社会』の意義」論文における考察

1）中国古典に見る「社会」の用例

銅直教授は中国における「社会」の意義を明らかにするために論文の「一」を『社会』の諸用例とその実体」と題して、中国の諸古典文献の中で「社会」という用語がどのように用いられているかをできる限り広く明らかにすることから考察を始めている。そこでは次のように、蔵内数太の研究にも引用されている「明道先生行状」に対する言及から説明が始められているが、これまでの研究経過をふまえて、1. その用法の変化についても考察を加える必要があること、2. 少量の例から考察するだけでは不十分であり、さらに他の用例についてもより広く渉獵し考察を加える必要があること、を指摘している。

抑々「社会」なる用例は従来極めて僅かしか注意されて居らず、初めはただ二程全書明道先生行状中の「郷民为社会」の一例に止っ

て居た。しかもその意義については明確な記述がなされていなかったのである。「社会」なる文字は果して如何な意味であろうか。私は初めこれを支那学専攻の学友浦川源吾君に問いその研究を促した。浦川学士の「社及社会考」はかくて雑誌「哲学研究」に掲載されるに至ったのである。亡友浦川君の論文は恐らく我国に於いて「社会」についての最も早い研究論文の一であろうと思う。それには「社」に関する多くの研究が進められ、又「社会」の出典についても更に一つの新しい用例を提供され、そして「社会」とは土地神を祭る祭場にその神を崇拜する範囲の地方の人民が一時的に会合することであり、社会学上の「社会」の訳語として必ずしも妥当ではないとの意向を述べられている。然し私はこの問題についてはただ一二の用例をもって全般を推すことの必ずしも正当でないことを考えた。社会に分化発展があり従ってこれに対応するものとしての「社会」なる用語の意義にも亦自らなる分化発展があるに相違ないと考えたからである。従ってこの問題の闡明には更に多くの事例の蒐集が必要であり、又それは将来必ず漸次に成されるであろうと期待していたのである⁽⁵⁾。

なお、こうした研究経過・手順について示すなかで、銅直教授の示唆も関係する浦川源吾の研究⁽⁶⁾が、先行研究の中で最も早い研究例であると指摘している点も今日注意される必要がある。

こうした研究手順についての考え方にもとづいて、銅直教授は「さて私は第一に中国文献に於いて『社会』なる用語が如何に使用されているか、先ずその使用例を点検したいと思う。／私の知るところによれば今日まで諸家によって挙げられている用語は次の如きものである。」⁽⁷⁾として、次の文献をあげている。

唐斐孝源貞観公私画史・田園社会図

舊唐書・玄宗本紀

金盈之 新篇醉翁談錄

陶 穀 清異錄

周 密 武林旧事

孟元老 東京夢華錄

程伊川 明道先生行状

王子一 劉晨阮肇誤入桃源雜劇

吳自牧 夢梁錄⁽⁸⁾

こうしたそれまでに引用されている文献に加えて、さらにここに示されている中でそれまで最も古い用例とされてきた「貞観公私画史」よりも古い用例として、元魏興和元年（539年）に訳出された「正法念処經卷第九・地獄品之五」の次の一文をあげ、「寡見によれば今日までのところ『社会』の用例はこれを以って最も古しとする。」と位置づけている。

何者妄語、謂邑子中、社等会中、……………彼人如是、社会等中、妄語惡説、以如是因、如是因縁、身壞命終、墮彼地獄（下略）⁽⁹⁾

この用例について、銅直教授は「右経文中にはその説くところの『社会』なるものが何であるかについて特記するところなく、用例としては極めて簡単な記載に過ぎない。」として、この当時「社会」がいかなる意味内容を持つ用語として用いられていたかは明らかにすることができないという慎重な考察にとどめている。しかし「ただ『社会』の用例としてそれが年代的に比較的に古いことを注意すべく、又それが仏典漢訳の訳語として用いられているということは、この熟語が恐らく当時一般の人々に聞きなれた言葉であつたろうことが推測されるのである。」と、この用例から「社会」という用語の使用が一般化していたと推測されることを指摘している。さらに日本への移入について「この経典は古く日本に渡来し、源信僧都の往来要集の八大地獄の状景の典拠となつたといわれて居

るが、勿論『社会』という用語がこれによって我国に移入されたという事実は恐らくあるまい。」と、日本ではおそらく一般的には使用されるに至らなかったであろうとの推測を述べている⁽¹⁰⁾。

次に、銅直教授は一転して「社会」という用語の最も新しい用例として、次に掲げる乾隆5年(1740年)の「欽定康濟録」卷之二に記されている程泊淳(明道)の事跡に関する記事をあげている。

…(略)…郷民社会、…(略)…
 …(略)…故程夫子於郷民社会之時、…(略)…

この文章について銅直教授は「右の文は明かにかの明道先生行状によったものであるが、然し二程全書原文のままではなく、撰者自らの記述として挙げられているのである。」と指摘しているが、これは銅直教授が「社会」という用語が乾隆5年(1740年)当時一般的に用いられていたと理解していたことを示すと考えられる。また日本への移入については、この「二程全書」は宋学の流行とともに我国に行われ、この明道先生行状は近思録や伊洛淵源録にも収録され徳川時代の学者にひろく読まれたものである。有賀博士のいわれる如く、これが Society に対する訳語の典拠となっていることは略疑のないことと思われる。⁽¹¹⁾と示している。

銅直教授はその上で、この文献から遡って原文となった「明道先生行状」(宋代)の中の「郷民為社会」という一句を含む一節を引用し、次のように検討を加えている。

郷民為社会とか郷民社会とかは名詞的に用いられ、郷民社会之時といえは動詞的な使用である。そしてこの場合に用いられた「社会」の意味は、前文に「郷民の遠近を度りて保伍を為す」とあるから、それは実体的には郷民の結合体を表し、又「郷民社会之時」という

意味をもってそれ等結合体の集会という意味をかねていることが知られる。然し謂うところの「社会」そのもの(の一筆者補)内容については特に詳しい説明がなされてはいないのである。ただこの文に於て知り得るところは社なるものが伍保と関聯があり、「社会」なるものと諸郷の学校とが亦密接な関係をもっているということである⁽¹²⁾。

ここでは、この用例から「社会」という用語は名詞的に用いられる場合と動詞的に用いられる場合があり、名詞的に用いられる場合には「郷民の結合体」を意味し、動詞的に用いられる場合には「結合体の集会」を意味すると理解されることが示されている。その上で、「我々はここに前述の諸用例よりも更にもっと具体的に『社会』なるものの形態や機構機能を明にし得る他の一用例を挙示しよう。」として、「義倉社倉」が「社会」の一形態をなすものであったと指摘し、明の俞汝為の「荒政要覧」の中の次の記載をあげている。

荒政要覧卷之四

義倉社倉法

嘉靖八年己丑三月

命行義倉社会法、…(略)…

この一文を検討して、銅直教授は義倉は本来官設官営のもの、社倉は設立や構成運営ともに民間的・自治的なものであり、各里社に設立されていたことを示し、その上で「義倉『社会』、すなわち義倉の基礎となる「社会」とは「…(略)…地域の共同社会を基礎として構成された機能的社會集團であることを知る。」と当時(嘉靖8年は1529年にあたる)用いられていた「社会」の意味・内容を示している⁽¹³⁾。

さらに、他の新しい用例として「竹窓二筆」の中に見られる明・万曆雲棲寺沙門株宏著「結社会」をあげ、この文章の内容が晋慧遠の白蓮社(念仏結社と理解される)の徒が男女多数の

結社をなして世間の譏りを受けたことに対する戒めであるところから、「ここに謂うところの『結社会』なるものは、明に今日我々の社会学に於いて用いらる結社 association に該当するものである。」⁽¹⁴⁾と指摘している。

銅直教授は「以上挙ぐるところの諸例について知るとく、『社会』なる用語は中国に於て実に種々異った意義を有するものなのである。」と、ここまでの考察ではまだ「社会」の意味内容を特定できないとして、さらに「我々はその用語の背景をなすところの实体と、又『社会』なる用語によって表されたる社会的事実の由って生して来た歴史的淵源を討ね、聊か中国に於ける『社会』の意義を明にしたいと思うのである。」⁽¹⁵⁾という方向で研究を進めることを示している。そして「然るに今『社会』の意義を明にしようとすれば、先づ『社』なるものが中国に於て本来如何なるものであったかを理解しなければならない。この点については今日現に諸家によって多くのことが明にされているが、私は特に『社会』なる観点から中国に於ける『社』なるものが如何なる起源と変遷をなしたか、今その一斑について少しく社会史的考察を試みたいと思う。」⁽¹⁶⁾として、この論文の第二段階である「社」の意味内容の解明、「二、社の古代的形態」へと考察を進めるのである。

2)「社」の意義

銅直教授は「悠久なる中国古代に於て『社』の起源を知ることは極めて困難である。」としつつも、はじめに「説文」を取り上げ、「説文には『社』を解して『地主也、从示土、春秋伝曰、共工之子句龍為社神、周礼二十五家為社、各樹其土所宜木、社、古文社』としている。説文の説明は簡潔な記載の中にいろいろの要点を含んでいるが、社に祭る神とこれを祭るものの

集団とは如何なるものであったか。それについては後に順次に述べることにする。」とした上で、「先づ初めに社の形態を見ると、社の古字が社であり、それは小高き封土の上に木を植えたものの象形であって、社の古い形態を表わしているものと思われる。」と、字形から「社」の最も古い意味を考察し、その上で「周礼大司徒」(鄭玄註)、「墨子明鬼篇」、「礼記表記篇」などについて考察を加えた上で、「我々は社の初めの形態を研究する時、信仰即ち祭らる神とその祭儀の問題と、これを祭る人々の集団の問題と、その祭を主宰する司祭としての王との三つの方面があることを知るのである。」⁽¹⁷⁾と、「社」について明らかにするためには三方面からの考察が必要なことを説いている。

「祭を主宰する司祭としての王」(天子)については、祭祀を司る者、天を祭り神を祀る祭儀を独り行うことのできる者を意味すると示している⁽¹⁸⁾。「信仰即ち祭らる神とその祭儀」については、「神」としての「社神」は本来地神であり、地霊を祓い鎮め、これを taboo とすることは土地を占有する経済的行為の面を含み、さらにこの祭りは民心を協同・統一する政治的社会的行為としての意味を持ち、封建的支配の中心をなすこと、さらに軍事的意味を持つことを示している⁽¹⁹⁾。「祭る人々の集団」については、本来は部族のような血縁的集団であったものが、郡県のような地縁共同社会が成立していく過程で地縁社会的なものに変化し、「…(略)…『社』は、転じて社を中心とする聚落共同体の意味となったのである。」と示している⁽²⁰⁾。

このように「以上我々は社なるものの意義を主として祭らる神とこれを祭る民衆との関係とに於て概観した。」とした上で、「…(略)…『社』なるものの意味が如何に多義的に変遷したかを左に要約して列記する。『社』は実に七

義を有している。」として、次のように整理して示している。

- 一、社として祭る神そのもの
- 二、社の祭りをを行う行為そのこと
- 三、その祭祀を行う場処
- 四、春秋定時に祭りの行わるる日、即ち社日
- 五、一社を共立する自然的な民衆の聚落共同体—血縁的な社会と地縁的な社会
- 六、かかる聚落共同体がその共同生活を営むために作り出す民間的機能団体としての組合
- 七、特殊的な任意団体としての個々の結社⁽²¹⁾

3) 「会」と「社会」の意義

以上の「社」についての考察に比して、紙数の制約があったのか、「会」についての考察、両者を統合しての「社会」という用語・概念についての考察はきわめて簡略になっている。それは次の文章が全てである。

元来「社会」の「会」なるものは任意の結社、結合、会合の意味をもつものであるが、共同社会としての「社」が、社会の分化発展の結果次第に部分的な任意社会を分岐し、遂に「社」と「会」とが実質上区別するところなく使用さるに至るのである。即ちその初め血縁的なものとしての社は地縁的性格の社となり、これに対応して部族的共同社会としての社は地縁的共同社会としての里閭を意味することとなったのである。然るに地縁的共同社会としての「社」はやがて更にその営む機能的社会集団を意味する「社会」を分岐し、次いでこの地縁的基礎社会から幾多の特殊的任意社会としての「社」「会」又は「社会」を派生するのである。中国に於ける「社」又は「社会」の用語の種々が、これ等の社会的諸進化と相対応して我々に提示すること

を興味深く感ずるのである。我々は更にその諸変化の推移と「社会」の意義の種々とその淵源について考察を進めたいと思う⁽²²⁾。

銅直教授自らが明記するように、この論文における考察は当初の研究計画の全体を取り扱うものではなく、中間的考察にとどまり、なお考察すべき課題を残すものとなっているのである。残された課題についての銅直教授の研究内容を明らかにするためには、続稿である「『社会』続考」について検討しなければならないのである。

(3) 「『社会』続考」論文における考察

1) 「社」の原義とその意味の転化

銅直教授は「中国に於ける『社会』の意義」(1956年6月)論文を発表した後、すぐに引き続いて「『社会』続考」論文(1957年3月)を発表している。この論文では冒頭に「私は社会学論叢第四号に、『中国に於ける「社会」の意義』と題する論文を載せた。本篇は右社会学論叢上の論文の続篇をなすものである。」⁽²³⁾と記し、その位置づけを明らかにしているが、その内容を概観すると「中国に於ける『社会』の意義」論文では「社」についての考察が大部分を占め、「会」もしくは「社会」についての考察がきわめて簡略となっていた傾向が見られたのに対して、「『社会』続考」論文では文字どおり「社会」についての考察が中心となっている傾向が見られる。

銅直教授は初めに先行研究について、前論文でも触れたところであるが、「…(略)…今日中国に於ける特殊社会集団としての『社』及び『会』については、スミス、モース、根岸佶、清水盛光、平野義太郎、仁井田陞、福武直、今堀盛二等の諸氏によって可なりよく明にされて

いる。我々はこれ等諸家の詳細豊富な現地的調査報告により『社』又は『会』なるものの後世的形態について教えらるるところ甚だ多い。然しながらこれ等の研究は我々の主題とする『社会』そのものの研究とはその焦点を異にするものであり、従って我々はこれ等諸家の研究の中に、『社会』そのものの説明を求めることはできないのである。」⁽²⁴⁾と総括し、このような実態調査的な研究では調査実施当時の状況は知ることができて、「社会」という用語・概念の本源的な意味を明らかにするには不十分であるとの考えを明らかにしている。そして、それとは異なる方向から研究を進めようとするものとして、銅直教授自身のこの論文における研究目的、問題意識は「中国に於て『社会』なるものが果して如何なる実体を有するものであるか、それが中国社会に於ける意義はいかなるものであるか。我々社会学研究者としてたえずくり返し用ゆるこの『社会』なる用語が、本来いかなるものであり、又それは society, société の訳語として果して適当なものであるか否、これを理解することは社会学研究者の義務であるといわざるをえない。」という点にあると示している。その上で具体的な研究方法については、「然し『社会』という熟字は本来經典中の用語ではないため、汗牛充棟の中国文献中にも、その用例は極めて少いのである。従ってこの問題の解明には先づ『社会』の諸用例をあつめ、『社会』なる語が本来いかなるものとして用いられたかを知ることが必要である。」と示しているが、そこには「然しながら不幸にしてこれに関する研究は従来極めて乏しいのである。」⁽²⁵⁾とその限界を示している。

そうした先行研究の進展状況の中で前論文の発表後、「社会」の用例について「…（略）…有高巖博士著中国社会史、志田不動麿氏の『唐宋時代の社会といふ言葉について』なる講述要

記を見ることができた。」⁽²⁶⁾と参照しうる2先行研究を見出したことが示されている。有高巖『中国社会史』では「朱子・近思録 明道先生行状」、「周密・武林舊事」、「呉自牧・夢梁録」の3例が、志田不動麿「唐宋時代の社会といふ言葉について」では「舊唐書・玄宗本紀」、「金盈之・新編醉翁談錄」、「陶穀・清異錄」、「孟元老・東京夢華錄」、「周密・武林舊事」の5例が取りあげられている。しかし、これらの諸用例は全て銅直教授の前論文において取りあげられているものであり、新たな用例を示すものではない。銅直教授は、有高巖の研究に関しては中国における用語と社会学的概念としての社会を対応させている点が注意されること、志田不動麿の研究に関してはシャヴェンヌおよび出石誠彦の林叢崇拜起源説に賛意を表していることを紹介しつつも、「社」そのものについて知らなければならないとの自らの考え方を合わせて示している⁽²⁷⁾。そうした考え方にたって、「社」の起源に関する加藤常賢、出石誠彦、郭沫若による先行研究を検討し、さらに次のような先行研究について検討を加えてもなお、その起源は明確ではないと結論づけている。

社の信仰の起源の問題については最近中国における考古学的甲骨金石学的研究の進歩と、比較宗教史的民俗社会学的照明との交叉によって、はじめて真実なる研究が遂行されうであろうと思う。例えば中国外域地方に今日猶存しているシャーマニズム的なオボの如き、その形態に於て信仰において中国原始社会における社の原初的信仰と何等か共通するものがあるのではないだろうか。またデュルケミアンとしてのグラネ著「支那人の宗教」の如き、示唆するところ多いすぐれた著作であるが、社の起源についての実証的説明に於ては殆ど与えるところはない。中国に於ける社の信仰の始源については、今日なお未決の問題

として残されているといっただけである
う⁽²⁸⁾。

それゆえ、前論文における考察についても「我々はかく考えて、この問題については、主として周国家成立以後の文献によって知りうる範囲に於て、若干の理解を述べるに止めたのである。」⁽²⁹⁾とその考察に限界があったことを示しつつ、元来集団としての「社」は一部族の人々が共同に祀るところの社に起源したものであるが、ここから転じて多くの意味を有するようになったこと、時代の経過・社会的進化とともにその意義が多義化したことを示している⁽³⁰⁾。

このような基本的認識にたって「…(略)…『社会』の意義を明にするためには先づできるだけ多くの『社会』の用例をあつめ、『社会』なる語が中国に於て本来いかなるものとして用いられたかを知ることが必要である。」⁽³¹⁾と、くり返し自らの研究方法を示し、以下の考察へと進んでいる。

2)「社会」の原義とその意味の転化

銅直教授は「思うに『社会』なる用語の最も古い或はその本来の意義は、社日に於ける集団的賽会ということであろうと思う。」として、「舊唐書・玄宗本記に次の如き記事が見える。」と、その一節を引用している。

玄宗本記十八年六月辛卯、礼部奏請、千秋節休暇三日、及村閭社会並就千秋節、先賽白帝報田祖、然後坐飲散之。／(…略…)⁽³²⁾

この最も古いとされる用例によれば、村閭社会とは『社の会』即ち社日の賽会であることが明かである。」と示している。また、「正法念処経卷九地獄品中に見ゆる『邑子中、社等会中』、又は『彼人如是社会等中妄語惡説』ということも、勿論訳語としての使用であるとしても、その訳語そのものは恐らく社日に於ける村民の集会を意味したものと思われ、『社会』なる語は

当時既に民間用語となっていたものと推測されるのである。次にあぐる東京夢華録中の『社会』もまた、これと同種のものであったと考えられる。…(略)…文中の『社会』も亦社日の会をなすために諸生の錢をあつめたというのであって、会とは蓋し賽会の意味であろうと思う。元の王子一の雜劇中に見えたる『牛王社会』もまた、牛王社の社日の賽会の状況を示すものである。」⁽³³⁾と、なお3用例の検討をも加えて、「社会」は最も古くは「社日に於ける村民の賽会(集会)」を意味する用語として用いられていたと結論づけている。

このように「社会」の最も古いとされる用例が「社日に於ける村民の賽会(集会)」を意味するものであったとするならば、それは広義の society に対応する意味を持つものであるよりは、より狭義の共同体(それは今日の社会学の概念でいえば association に対する community、Gesellschaft に対する Gemeinschaft が想定されよう)という意味をより強く持つのではないかという疑問が生じてくる。この点について、銅直教授は次のようにそうした疑問点を提示し、さらにその疑問点に対する解答を得るための方策をも提示している。

右に示す諸用例は何れも社の賽会を意味するものであって、恐らくそれが「社会」の最初の意義であったであろうと思う。ただこれ等の諸用例を見ると、「社会」は society の訳語として一見適当なものでないように思われるが、然し「社会」の意義は、決してこの後世的諸用例の示すところのものに限らないのである。即ち等しく社の賽会を意味するものであっても、かかる賽会を通じて存在するところの社及び会そのものと共同社会とのつながりについては、上代と後代とに於て大きな変化があったことを注意しなければならない⁽³⁴⁾。

このようにして時代が下がるとともに「社会」の意味・内容が変化したことを指摘するとともに、その最近の用例として「明」時代における次の用例を示している。

…(略)…後代における「社会」なるものはその原初的な共同社会的意義を失い、遂には利益社会的任意社会を意味するに至ったのである。かかる最も後代の類型に属するものとしては、明の沙門宏株著竹窓二筆に見ゆる「結社会」の語であり、清・呉自牧の夢梁録にある「社会」も亦、これと類を同じくするものである⁽³⁵⁾。

銅直教授は「これ等諸用例については社会学論叢所載の拙稿論文中に列举したので、今ここにこれを重複することをしないが、…(略)…」としているが、前論文を参照するならば『竹窓二筆』にいう「結社会」とは念仏の結社であり、『夢梁録』の「社会」の項には文士の西湖詩社、武士の射弓踏弩社など種々の「社」や「会」が組織されていたことが記されているとの例を示している。こうした用例の考察を通して銅直教授は次のような結論を得ている。

我々は拙稿前論文に於て「社」の共同社会的意義について詳述したので、今ここにくり返すことを避けるが、右に挙ぐるところの諸用例によって、その初め共同社会そのものであった社が、後世に至って一の特殊な任意社会と化し、これに対応してもと社の会を意味した「社会」が、やがて遂に個々の「社又は会」の意味に転化するに至ったことを知るのである⁽³⁶⁾。

このように「社」が本来は「社日に於ける村民の賓会(集会)」を示し、今日的な意味で共同体としての意味を強く持った概念であったとしても、その用法、意味・内容は時代とともに変化し、「特殊な任意社会」、今日的な意味での結社体としての意味を持つようになったと結

論づけているのである。

3) 中間的存在としての「義倉社倉」

このように「社会」の意味・内容は時代とともに狭く共同体を意味するものから広く結社体を意味するものも含むものへと変化してきたととらえられているが、その変化の過程を明らかにするものとして、また変化の過程の中間に位置するものとして銅直教授が注目したのは、次に示すように「義倉社倉」であった。

近時、諸家の中国社会の現地的調査報告は、主としてこれ等後代の特殊的目的社会に関するものである。然るに全体社会分散化の進化過程に於て、その中間形態として、共同社会に基礎をおきしかもその共同社会の有する特殊の諸機能を営むための社会集団、即ち共同社会的機能社会が存在するのである。義倉社倉なるものがそれであり、我々は中国文献において義倉社倉もまた「社会」なる名を以て呼ばれ、そして又これと一聯の同種の社会形態がこの他にも種々存在することを知るのである⁽³⁷⁾。

そして「義倉社倉は中国社会に於て特色ある社会救済制度として知られ、その文献も豊富に存在し、その組織運営等について今日これを詳しく知ることができるのである。我々はその実体を明にすることによって、それが他の種々なる社又は会といかに有機的な連関を有し、またその淵源を討めることによって、それが中国における『社会』なるものの特質と由来とをよく理解することができると思うのである。」⁽³⁸⁾と、その考察が「社会」概念を明らかにする上で意味を持つことを示して、以下その考察に進むのである。中国における倉儲制度の淵源が古代に遡ること、制度としては常平倉が漢宣帝・五鳳4(B.C.54)年に穀価調節を目的として初めて確立されたこと、さらに隋・開皇5(585)年

に民衆救済のために義倉が設立されたこと、朱子が社倉法を改良し実施奨励して好結果を収めたこと、明・嘉靖8（1529）年に施行された義倉社会法によって義倉社倉が社会の範疇の一形態であることがより明確化されたこと、などの歴史的事実を簡潔に示している。その上で、義倉社倉は「…（略）…その本来の性格は一種の出資組合であり、貸借的債権関係のものである。」と結社体、もしくは機能集団の性格を持ちながらも、他方において「…（略）…共済的互助的組合として、所在の共同社会と密接に結びついている…（略）…」と共同体的な性格も持つことを指摘している。さらに、それが「講約・郷約」や「保甲の制」と密接な関係も持つことも合わせて指摘されている⁽³⁹⁾が、それ以上に重要な指摘であると考えられるのは、社倉は共同社会と密接な関係を持つが、それ以外にも共同社会の機能のために重要な種々の社が組織され、相互に緊密な連関を持っていたということである⁽⁴⁰⁾。その具体例としては農耕関係の目的を持つ各種の社（例として耕作組合としての社、蝗を駆除するための社、農作物見張のための社などが示されている）や社学・義学（村落によって設立されている自治的共同的機関である意味において社学であり、資力の乏しい家の子弟を就学させる公共的目的を持つ場合義学と称せられる）などがあげられている。

こうした考察の後に、銅直教授はスミス『支那の村落生活』を参照して定期的市場としての「集」あるいは「会」について考察している。同書では定期的な市場に関して、market = 集 = 単に人の集まることを意味する、fair = 会 = 遙かにより大きな人の集合を意味する、と使い分けられている説明の部分引用し、その上で「定期的市場としての会」について、次のような考え方を示している。

右によってこの定期的市場としての会も本

来社廟の祭礼を中心として開催されるものであることが知られる。然る時ここにいうところの会もまた「社の会」であり、一種の「社会」といってよいのであろう。即ちこの市場としての会は本来社の祭りの諸行事の中にその一として含まれるものとして発展してきたものであろうと思う。然しながら市場としての会なるものは、一般特殊目的団体としての会のように、一定の成員を有しその成員相互の間に集団としての組織があるのではない。勿論それは社廟を中心とした主催者があり、市場に於ける売手と買手との関係は、一の取引的信義道德という共同規範によって制約されているのではあるが、それは社会学的形態としての結社団体とは異なるものである。この場合の「会」の意義は即ち会聚、集会の会であって、我々はこれを形態学上、群集・公衆・会衆・大衆等と相似た中間的集団として取扱うべきものと思うのである⁽⁴¹⁾。

4) society の訳語としての「社会」の妥当性

このように中国における「社」、「会」、「社会」の用例とその意味・内容について考察を加えた上で、銅直教授は society の訳語として「社会」が妥当であると考えられるか否かという、本論考の結論を示すことへと論述を進めている。そこで示される結論は、以上の考察を総合した次のような内容を持つものである。

以上述べ来たように「社」及び「会」にはいろいろの意義と形態とがあり、両者本来その意義を異にするものであるが、両者の共通している集団的意義と、他方それがたどって来た歴史的社会的変遷とによって、後世遂に両者を殆んど同意義のものとして使用するに至らしめたのである。然しながら「社」なるものは本来基礎社会的のものであり、従ってそれは特に民間的・非官治的・共同社会的

結合という意味を含んでいるのである。即ち「社」は大体において英語の community に相当するものであり、これに対して「会」なるものは前記の定期市場としての「会」の如きものもあるが、最も一般的に、それは社より派生した特殊の association に該当するといつてよい。従って今日我々が社会学的概念として用ゆる「社会」というものが、中国においては上来述べ来ったような意味で「社」と「会」との関係体を表示するものと理解するならば、英語の community と association との上位概念としての society の訳語としてこの「社会」という語を使用することは大体において妥当であるといつてよいであろうと思う⁽⁴²⁾。

(4)「社会」概念についての検討

以上、本稿では「中国に於ける『社会』の意義」、「『社会』続考」の2論文を素材として銅直教授の「社会」という用語・概念の原義を中国古典に求め、その society の訳語としての適否を検討する研究について明かにしてきた。ここで付言するならば、2論文に示された銅直教授の研究の結論はその後に変化することがなかったものであり、それは1966年9月に刊行された『社会学(上)』にも、次に掲げると同様の趣旨・内容を持った説明が含まれていることから理解できる。

中国においても社会という熟語の使い方には時代的に若干の変化があるが、その語の中心となっているのは社である。中国古代における社の起源を知ることは容易ではない。それには言語学的並に民族学的研究が必要であるが、文献的に見れば既に農業時代に入っている周代において社は土地の神を祀ったものであることが知り得られる。…(略)…即ち社は村民の共同生活の中心であり、又村そのも

のを意味したので、社毎に義倉社倉や、その他農事のための民間組合が設けられ、かかる組合もまた社と称した。…(略)…元来会というのは、会合とは集会^(ママ)とかいう意味で、社会といえば、本来社を中心として催される集会という意味である。…(略)…然るに後にはこの共同社会の基盤から離れ、それと直接関係のない或る特殊な目的のために構成せられた、任意的結社としての社又は会というものが生じて来た。…(略)…かように中国における社及び会の意味には、歴史的に前後変遷があるのである。これによって我々は社が本来共同社会 community に相当し、会は結社体 association を意味したものであることを知った。ところで、今日、我々が社会学においていう、一般的社会としての society の概念は、共同社会 community と利益社会としての結社 association とを併せ含む、より上位の一般的概念である。かように考えると社会 society の訳語として社会という熟語を用いることは、大体妥当であるといつてよい⁽⁴³⁾。

ここにその考察が集約されて示されているとも考えられる銅直教授の所説が、先行研究の結果、他の研究者の所説と比較してどのような特徴を持ち、どのような位置づけを持つかをここで考察して、本稿における小括としたい。

銅直教授がその論文の中で「『社会』なる文字は果して如何な意味であろうか。私は初めこれを支那学専攻の学友浦川源吾君に問いその研究を促した。」⁽⁴⁴⁾と記している、浦川源吾の論文「社及社会考(一)」「社及社会考(二)」(『哲学研究』第7巻第8冊・第77号/第7巻第9冊・第78号、1922年)は日本におけるこの分野の研究として最も早く発表された研究と考えられる。浦川源吾は「社」について考察した上

で、「社会」について「…（略）…社会とは或る神を崇拜する人民の團體が其の神を祭るために特定の日に會合するを意味するものと言へる」⁽⁴⁵⁾、「以上を要するに社会とは社の神を祭祀するために其の神を尊崇する人民の聚合を意味するものである、」⁽⁴⁶⁾ととらえている。こうした考察の結論を浦川源吾は次のように示している。

元來、此の論文の意圖は社會の語を考證するのが主で、併せて社とは何ぞやといふことに立入って研究したのである、以上の所述によって要論すれば、社会とは土地の神を祭祀するために其の土地の神を崇拜する範圍の地方の人民が、土地の神を祭る社場に會合することで、此等の人民の集合は、春秋二季の或る定まった日に一時的になされるものであって、祭祀が終れば又散ずるのである、斯く言へば社會學にて言ふ社會の意味と大に違へるを知るであらふ⁽⁴⁷⁾。

このように先行研究である浦川源吾の論文においては、銅直教授と同じ「明道先生行状」を考察の素材としながらも、示された結論は、そこで用いられている「社会」の概念は現代的な「社会」の意味・内容とは異なっているというものであった。銅直教授は先行研究である浦川源吾の論文を十分参照しつつも、それとは異なった独自の結論を得ているのである。

また、銅直教授がその論文の中で「…（略）…又我国に於いて『社会』なる語の明治以前に於ける使用については蔵内数太博士によって注意されて居り、…（略）…又蔵内博士の社会学概論の中にもこれについての記述がある。」⁽⁴⁸⁾と記している蔵内数太の著書『社會學概論』（1953年）を見ると、「社会を意味する西洋の語に『社会』と云う語が訳語として固定するに到った」事情について説明した上で、中国古典における「社会」という用語の意味・内容について、

次のように説明している。

東洋の典籍における社会と云う文字の初見は、「近思録」巻九に引かれている明道先生行状記の「郷民為社会、為立科条」である。此處に云うところの社会とは、土地の神を祭るために一定の地域の人民が社場に會合することであると解されて居り、或はまた一定の地域の人民の團結そのものであるとも解せられている。いずれにせよ今日の意味の社会よりは狭い意味の言葉である。独乙語のゲゼルシャフトもその語源を古代高地独乙語の sal と gisellio とに有し、処をともにする仲間を原義としてしていると云うが、社会の文字には更に人と土地との「社会的」結合が意味せられている。

…（略）…社は最初より直ちに土神を意味したものではなかったようであるが、また或段階に於てそれが土神を意味して来たことも疑われない。そして土地を神格化することは土地に対する人の内的結合を意味するから、文字に即して云うと、社会には人と土地との結合の意味と、人と人との結合の意味とが含まれていると云えよう。

ところで近世の人為的な團結としての社に由来する社会の言葉が、何故に人間の團結一般を意味する概念となったのであろうか。思うにそれは、人為的結合は社会的結合としては二次的なものであるにしても、発生の最も自覚せられた結合であることに関係しているであろう。結合と云うことを对象的に意識することは、家族や村落の如き自然的に吾々に与えられ、その中に吾々が生長しているところの集団に於てよりは、却って吾々が意識的に結成するものの場合に於てより容易である。さまざまな人間集団も要するに人々の結合事実であると言ふような見解は、この種の結社の反省より導かれ易いのである。これが「社

会」を結合の一般的概念となるに到らしめたわけであると思われるが、同様なことは西洋の言葉に於ても云えるところである。法的な用語となって人為的な団結を意味したゲゼルシャフトは、やがて社会一般を意味する言葉となって居り、今日意識的・目的々な団結の種類を表現する言葉であるゲゼルシャフトやソサイエティーは、また広く社会一般を意味する言葉である⁽⁴⁹⁾。

ここに端的に示されているように、蔵内数太は「社会」には人と土地との結合の意味と、人と人との結合の意味とが含まれている、近世の人為的な団結としての社に由来する「社会」の言葉が人間の団結一般を意味する概念となったのは、それが人為的結合として二次的なものであったとしても、発生の最も自覚せられた結合であり、さまざまな人間集団も要するに人々の結合事実であると云う見解がこの種の結社について考えること（蔵内は「反省」という用語を用いている）から導かれ易いからである、と結論づけたのである。蔵内数太は「社」についても考察を加えているが、概論書中の記述であったことも影響してか、ここでの考察は「社会」が「結合の一般的概念」を代表するものとなった事情、それが適切であったか否かの考察にとどまっているといわざるをえない。

これに対して銅直教授の考察はこれまで詳細に記してきたように、「社」と「会」の各々について考察し、「社」が共同体 = community に相当し、「会」が結社体 = association に相当すること、それゆえ「社会」が今日、我々が社会学においていう、society（一般的社会としての概念 = 共同社会 community と利益社会としての結社 association とを併せ含む、より上位の一般的概念である）の訳語として妥当であるとの結論を示している。

以上の考察の結果、銅直教授の中国における

「社会」という用語・概念の意味・内容を明らかにし、西欧的な用語である society の訳語としての適否を検討しようとする研究は今日の時点において、次のように評価できると考えられる。

第1に、その深い中国古典や歴史に関する学殖を生かして、できうる限り原典を直接検討し、研究を進めた点において文字通りオリジナルな、独創的な研究と評価することができる。この点に関連して、この論文が発表された当時（1956／1957年）この領域に関する研究はほとんど見られなかった、あるいは多少あったとしても十分な考察を加えたものではなかったと考えられることを付言することもできよう。

第2に、今日数少ない研究として辞典などに引用されることが多く、当時唯一といっても良いほぼ同じ課題を研究した先行研究である蔵内数太の研究と比較してみるならば、蔵内数太の研究が「社」「会」「社会」を一体化した検討であったのに対して、「社」「会」を個別に検討し、それを総合して「社会」の妥当性を検討した点で、より詳細で独創的な研究であると評価することができる。

第3に、1956／1957年以降の研究についても、文献検索などによって知りうる限りでは「社会」概念を中国古典に求める類似の研究・論文は発表されていないと思われるのであって、この点において銅直教授の研究は今日においてもなお追随する研究を見ることのない研究として高く評価することができる。

（未完・以下次稿）

[注]

(1) 塩原勉「社会」（森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』1993年、所収）590～591頁

(2) 銅直勇「中国に於ける『社会』の意義」

- (『社会学論叢』第4号、1956年、所収) 12
頁
- (3) 同上 11頁
- (4) 同上 11～12頁
- (5) 同上 12頁
- (6) 浦川源吾「社及社會考(一)」 「社及社會考
(二)」(『哲學研究』第7巻第8冊・第9冊
／第77・78号、1922年、所収)
- (7) 銅直勇 前出(1956年) 12頁
- (8) 同上 12～13頁
- (9) 同上 13頁
- (10) 同上 13頁
- (11) 同上 13～14頁
- (12) 同上 14頁
- (13) 同上 14～15頁
- (14) 同上 15頁
- (15) 同上 15～16頁
- (16) 同上 16頁
- (17) 同上 17頁
- (18) 同上 17～18頁
- (19) 同上 18～20頁
- (20) 同上 20～23頁
- (21) 同上 24頁
- (22) 同上 24頁
- (23) 銅直勇『社会』続考(『日本大学研究年
報』第7号第2分冊、1957年、所収) 9頁
なお、本論文については銅直教授所蔵の
もののコピーを引用・参照したが、銅直教
授自身により訂正されている箇所があり、
引用はこれによったため印刷・公刊された
ものと若干異なる部分がある。以下におい
ても同様であることを、ここで合わせて付
記しておく。
- (24) 同上 9頁
- (25) 同上 9～10頁
- (26) 同上 10頁
なお、この2研究は有高巖『中国社会史』

- 1948年、志田不動磨「唐宋時代の社会とい
ふ言葉について」(『史学雑誌』第48編第5
号、1937年?)であるが、著者は直接参照
することができなかった。
- (27) 同上 10～11頁
- (28) 同上 11～12頁
- (29) 同上 12頁
- (30) 同上 13～14頁
- (31) 同上 14頁
- (32) 同上 15頁
- (33) 同上 15～16頁
- (34) 同上 16頁
- (35) 同上 16～17頁
- (36) 同上 18頁
- (37) 同上 18～19頁
- (38) 同上 19頁
- (39) 同上 18～29頁
- (40) 同上 30頁
- (41) 同上 34～35頁
- (42) 同上 35頁
- (43) 銅直勇『社会学(上)』1966年、131～136
頁
- (44) 銅直勇 前出(1956年) 12頁
- (45) 浦川源吾「社及社會考(一)」(『哲學研究』
第7巻第8冊／第77号、1922年、所収) 32
頁
- (46) 同上 34頁
- (47) 浦川源吾「社及社會考(二)」(『哲學研究』
第7巻第9冊／第78号、1922年、所収) 40
頁
- (48) 銅直勇 前出(1956年) 11頁
- (49) 蔵内数太『社會學概論』1953年、2～4頁

[付記]

1. 本論考は当初3回に分載することを計画して
いたが、「社会」概念の研究についての紙数
がきわめて多くなったことから、本稿で取り

あげた中国古典における社会概念の研究と、ギリシャ・ローマに発する西欧における社会概念の研究を分載し、全4回の分載と変更することとした。この点についてここでおことわりするとともに、ご理解をいただきたい。

2. 本来ここで参考文献を明示すべきところであ

るが、本論考は4回の分載を予定しているので、その最終回の末尾にまとめて記載することとしたい。この点に関してもご理解いただきたい。

(たかしま ひでき、本学科教授)